

第1回「近藤賞」

近藤賞選考委員会委員長 今野 浩

9月26日に政策研究大学院大学で開催された日本OR学会創立50周年記念式典において、近藤先生、Elise del Rosario IFORS会長、および各国のOR学会会長御列席のもと、青木本学会会長より第1回近藤賞の賞状、賞牌（および副賞100万円）が茨木俊秀関西学院大学教授に授与された。また受賞式に引き続き、茨木教授の「汎用ソルバによる問題解決へ向けて」と題する受賞記念講演が行われた。

近藤賞は、本学会の功労者である近藤元会長が満90歳を迎えられるのを機に、OR学会の次の50年の発展に資するために創設されたもので、(広い意味での)ORの分野で傑出した業績を挙げた個人またはグループに贈られる、本学会最高の賞と位置づけられるものである。

3月末の募集締め切りまでに5人の有力な研究者が推薦される中、近藤賞選考委員会（青木利晴、伊理正夫、今野浩、刀根薫、長谷川利治）で慎重に審議を重ねた結果、全員一致で茨木教授が選出された。

本賞設立にあたって、本年はじめより募金活動を行った結果、1500万円を超える御寄付をいただいた。このことは、会員諸氏の学会および近藤賞に対する期待の大きさを表すものと考えている。なお募金活動は今後も継続していきたいと考えているので、今回御寄付いただけなかった方も、御寄付下さった方もども、御協力を御願ひ申し上げる次第である。

〔選考理由〕

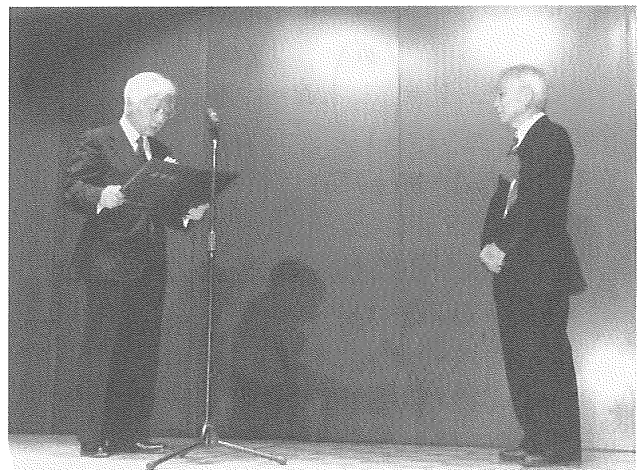
茨木俊秀氏は1963年に京都大学電気工学科を卒業されたあと、京都大学工学部数理工学科助手、同助教授、豊橋技術科学大学工学部情報工学系教授を経て、1985年に京都大学工学部数理工学科教授に就任された。以後2004年3月に停年退官されるまで、世界的な研究業績を挙げるとともに、多くの後継者を育てた。また京都大学を退官後は、関西学院大学理工学部情報科学科教授に就任し現在に至っている。

茨木氏は40年間にわたって、組合せ最適化、離散数学に関する研究を中心に、ORとその周辺の分野で、400編を超える学術論文を発表された。

初期の頃は、組合せ最適化問題の汎用解法である分

枝限定法を組織的に分析するとともに、動的計画法との関係を解明された。その後、データベースの一貫性制御のための新しい方式を提案されたほか、ゲーム理論、機械スケジューリング、グラフ・アルゴリズム、ブール関数の分野においても多大な業績をあげ、日本を代表する研究者として世界的に高い評価を獲得している。

近年は、離散最適化が社会や産業活動において必要とされる問題解決の本質的役割を担っているという視点に立ち、その問題解決エンジン群の開発を積極的に推進してこられた。その基本的な考え方は、離散最適



近藤賞受賞式風景



近藤賞賞牌

化問題の中からいくつかの標準問題を定義し、それらに対してメタヒューリスティクスに基づく実用性の高いアルゴリズムを実装するというものである。このような包括的アプローチは他に類を見ないので、メタヒューリスティクスの実用性を実証した研究として高く評価されている。

以上の茨木氏の業績に対して、1970年に電子情報通信学会より米澤賞、1973年に本学会より文献賞、1988年にシステム制御情報学会より樺木論文賞、1998年に電子情報通信学会より論文賞、2001年に本学会より業績賞、2003年にはスケジューリング学会

より学術賞など、数多くの賞が授与されている。

また、数々の国際会議の組織委員や実行委員のほか、20誌に及ぶ国際学術誌の編集に携わるとともに、イリノイ大学、ウォータールー大学、サイモン・フレーザー大学、ラトガース大学などの一流大学の客員教授、計算機協会 (ACM)、日本 OR 学会、電子情報通信学会、情報処理学会のフェロー、平成 10 年度と 11 年度には本学会副会長などを務めている。

以上のように、茨木俊秀氏の多大な貢献と功績は近藤賞にふさわしいものと判断し、同氏を第 1 回近藤賞受賞者として選出した次第である。(撮影：筒井美樹)

茨木先生の第 1 回近藤賞受賞に寄せて

茨木先生、第 1 回近藤賞受賞おめでとうございます。

先生には、学部 4 年以來ご指導をいただいております。お世話になりっぱなしで感謝の気持ちで一杯ですが、編集委員会からのご依頼により僭越ながら失礼を顧みずプロフィールを思いつくままに書かせていただきます。

茨木先生が春、秋の研究発表会などで前の方に席を占められ、本質を突いた鋭い質問を矢継ぎ早にされるのが印象に残っておられる方も少なからずいらっしゃるかと存じます。学生時代にご指導を受けた際のゼミも正にそのようでした。先生のお机の上には、世界中の一流の研究者から送られてきた technical report がうず高く積まれていましたが、それを学生に割り当て週に 1 回 1 論文のペースで論文ゼミを実施されておりました。ゼミの際、少しでも予習に手を抜いて雑駁な説明をすると、直ちに不備を突く鋭い質問が飛んできました。一方、しばらくじっと考えておられると思うと、初見の論文にもかかわらず、「要はこういうことだよ」という簡にして要を得た説明を分かりやすくしてくださり、その理解力のすごさに感服しました。卒論、修論は、草稿を真っ赤に添削していただきました。また、論文投稿の際は徹底的に論理の飛躍や構成の不備等をご指摘いただき、何度も修正して初めてゴーサインが出ました。修正後は見違えるように、すっきり、かつ、読みやすくなりました。

先生の初期のお仕事に、コスト関数をもつ有限状態機械による動的計画法の理論的モデル化があります。そこでは、有限状態機械で受理される記号列集合のある同値関係による特性付けである Myhill-Nerode の定理の半順序への拡張がはかられています。このように、深い学識に裏打ちされることによって、一見多様に見えるものごとの本質を一瞬にして見抜き、より高い立場からすっきりと整理され、また、普通の人なら見逃すような点もゆるがせにせずそこから新しい研究に結びつける着眼点の鋭さが先生のご研究スタイルの特徴のひとつです。先生は、常に産業界への普及に尽力されてきましたが、簡潔かつ分かりやすい書物や講演等にこれは遺憾なく発揮されてきました。先日の本学会第 58 回シンポジウム「職業としての OR」において、講演者、パネラーの方々が異口同音に応用における数理的、理論的素養の重要性を強調されておりましたが、まさにその素晴らしい実践例といえるでしょう。

現在もバリバリの現役としてご活躍され、ご研究はもとより、大勢の指導学生やポスドクにそれぞれ異なる興味深いテーマを与え、OR 学会研究発表会等で発表させておられるのに敬服しました。近藤先生にあやかり、いつまでもお元気でご活躍されることを心より祈念申し上げ、筆をおきます。

増山 繁 豊橋技術科学大学

